

第20分科会

「障害児・障害者の教育と福祉」

執筆者：武藤素子 小野島直彦

第20分科会は一日目に分科会全体でミニ学習会やレポート報告をもとにした意見交流を行い、二日目に二つの分散会に分かれてそれぞれ5～6本のレポートの発表と討議を行った。

一日目はミニ学習会として名寄市立大学の小野川文子先生に「寄宿舍教育とは？」とのテーマで現在の全国の寄宿舍の状況や意義について語っていただいた。特に卒業生調査の結果をもとに子ども本人や保護者にとっての寄宿舍の意義を探っていく取り組みの部分では、生活技術の習得だけでなく家族以外の人とつながった経験が自立への自信や意欲を高めるなど、人とかかわる力を培う場となっていることが語られた。保護者が過保護、過干渉になりがちな環境の中で、「彼らはどこかに出かけたいわけではない。友達といたい、親から離れたいという願いを持っている」という小野川先生の言葉が印象的であった。

次に「全国学級・学校学習交流集会 in 奈良」で発表予定の道内の高等支援学校寄宿舍職員からの報告をもとに意見交流を行った。現在の学校で取り入れられつつある「懲戒規程」に着目しながら特別支援教育の現在に触れる内容で、特別支援教育の学校現場で懲戒規程が機械的に運用しようとしていることに疑問を呈すると同時に、現在学校現場で「出来高」を求められ、自分のできなさを突き付けられている子どもたちの姿などが語られた。意見交流の中では連携機関とつながるという視点での意見や、教育とは時間がかかるものであり、子どもの内面に迫ることなく安易に懲戒規程を運用しようとする事への疑問などが出された。発表者の思いが「最後の最後まで子どもの居場所としての寄宿舍を守りたい」という言葉に凝縮されていたレポートであった。

岡山県で開催された「みんなで21世紀の未来を拓く教育のつどい2017」の参加報告では、基調報告のタイトルの「情勢に惑わされず、流されず学習権保障の本質を追究する教育実践を」に示されている通りに現在の経済優先の社会情勢と向き合いながらどのような実践を行っていくべきかを考えさせられたことや、「津久井やまゆり園」がもたらした課題の重さが語られたことなどが報告された。

二日目は全部で11本のレポート（内1本は資料のみ）が集まり、主に障害児学級での実践と障害児学校での実践の二つに分散会を分けて討議を行った。

障害児学級分散会では、5本のレポート報告があり、以下のように発表、討議が行われた。

①「初めて教科書を使ってみて」：授業中は学習したことを理解できているようでも次に学習する際には前回の内容を覚えていないことが多く、学習が積みあがっていかない、という児童と教科書を使ってみた取り組みについての実践レポート。筆者は特別支援学校から小学校の特別支援学級へ転勤した期限付き教諭で、児童を理解しようと努力しながら実

践を積み重ねている様子が伝わってくる報告であった。

②「なぜお互いにせめあうのか」：特別支援学級の実践の中で、最近子どもたちが相手に対する攻撃的な態度を見せることが特に目に付き、また保護者と教師との関係の中でもお互いに理解しようとするというよりも相手の失敗を喜ぶような姿が見えることに戸惑っている、という現状が書かれたレポートであった。意見交流の中で、「○か×か」という価値観の中でしか行動していない子どもの思いや、自分を認めてもらいたいことの裏返しとしての相手への攻撃ではないか、という意見があったほか、「学力条例」が定められる、といった現状の中で普通学級で学習についていけない児童の行き場として支援級が利用されていることで「学力保障の下支えをさせられている」という問題を実感している、という意見から、通級指導についてあくまで自立活動を行う場であるが補習的な役割を請け負わされる懸念もある、という今後も注視していかなければいけない課題も挙げられた。また、保護者とのかかわりの中では保護者自身が非常に大変な生活の中に置かれており、支援が必要な子どもを育てる上で教師は保護者の理解者になろうとする努力が必要だと思う、という意見も出された。

③「北海道児童デイサービスの役割と課題」：児童デイサービスの支援員としての子ども達とのかかわりや、専門機関として地域の中で求められている役割について記されたレポートであり、学校や行政など他機関との協働についても触れた様々な示唆に富んだ報告であった。教師として学校現場も経験している筆者ならではの視点から語られる、「その場にいられるなら寝転んでいたっていいんだ、という考え方」や「自分たちでルールを作ってやっていくという実践」など児童デイの実践から多く学ぶことがあったという記述や、学校からデイサービスに一方的な指示が下りてきたというエピソードに代表される連携面での課題などは深く考えさせられるものであった。

④「Bさんが求めている指導とは」：他の子どもと一緒にルールのある遊びをすることが難しく、好きなことをする時間にはオリジナルの遊びをしているというBさんとの実践について書かれたレポート。支援級の児童だけでなく、周囲の児童とのかかわりにも触れながら意見交流が進められた。また、Bさんが独自のルールで遊ぶことなどについて、共同研究者から『『独創的』ということではなく、『遊びきれていない』という感じがする。教師がちらかりをまとめてあげて、最後まで遊びきらせてあげることも必要なのではないか』との助言があり、教員がどのように子どもとのかかわっていくかということを考える上で貴重な意見となった。

⑤「楽しい生活をつくろう～R男に学んだこと～」：再任用で特別支援学級の担任となり、子どもと食生活を中心にした実践を行ったレポート。再任用ということで1年限りの指導となる前提での実践となることがどのように影響したかという質問に対し、「最初に同僚にも保護者にも1年限りになることは伝えてあり、特に保護者には教師にもそれぞれ得意不得意があるので今年は自分ができることをやるが、来年はまた違う先生が違うことをやっていく、と伝えてある」との発表者の答えは、現在教職員集団の中で思い切った実

践ができないでいる教師への力強いエールとなった。最後に司会者から『将来の楽しい生活のために今苦しい思いをさせる』という考え方が多い中で、『楽しい生活のために今を楽しく』という考え方の実践がとてもいいですね」という感想が述べられた。

分散会のまとめとして、共同研究者の渡邊悌氏から「学校での生きづらさ」という課題にはいろいろな要因が絡んでおり、集団作りをしながら指導を行っていくことは難しいが、集団を保障していくことはとても大切である、という助言をいただき、福祉と教育の縦割りに代表されるシステム上の課題など、学校の外にまで視野を広げていく必要にも触れられていた。

続いて同じく共同研究者の二通諭氏からの提言があった。現在の教育が抱える諸課題は教育哲学不在がもたらしているのではないか、という切り口から、ルソー的な「眠っている力を引き出す」という視点と、ジョンロック的な「白紙にあるべき姿をつぎ込み、かたづかっていく」という相対する視点との対立が、歴史的にも、そして実は今現在も続いているという分析が示された。また、現在教育現場では上からの圧力による二項対立というよりは、現場の暴走が自分たちの首を絞めているのではないか、という視点から、現場の教員同士のつぶし合いともいえる現状を打破していくためには「組合の言語」でなく「共通言語」を使っていく必要があり、文科省の言葉を使っていくことが有用なのではないかとの提言がなされた。さらには、教育実践の中心的な課題は「良き記憶」をつくることであり、いかにして楽しい記憶を作るか、ということの大切さが、愛着障害が記憶をめぐる問題であるのだということも含めて語られた。

障害児学校分散会では、5本のレポート報告があり、以下のように発表、討議が行われた。午前中は、3本のレポート発表を行う。「発達」「労働」が議論の柱となった。

1本目は、「世界をひろげる・人とひろがる～志向性と定位力～」室蘭養護学校の斉藤有美先生、斉藤利顕先生、渡部佳穂里先生の共同研究である。本レポートは、田中昌人氏の発達理論を元に検査結果や日常の様子などを、運動生理学的側面とルリヤ氏の神経心理学からの検討を加え、中核機制を作成し、毎日の実践の中での変化を丁寧に理解・分析したレポートであった。中核機制を「志向性の拡大・充実を基盤に人との共感の中で定位力を培う」とし、日々の生活の中での発達や変化を、志向性・定位力・私の発揮などの視点でとらえられていた。日々の生活を発達の視点でとらえることで、深く子どもの内面をとらえることができる、教師の姿勢の手本となるレポートであった。

2本目、美唄養護学校の玉島孝之先生の「あ、し、た、ほめる」指導で自己肯定感を育む」では、作業学習において、一人の生徒とのかかわりの過程が書かれていた。生徒との対話の中から信頼関係を築き、作業を一緒に楽しむことができるようになる実践から、教師の在り方や教師集団の在り方まで議論が深まった。

3本目は、南幌養護学校の小野島直彦先生の「作業学習の展開」であった。楽しく主体的・意欲的に取り組むことができる作業学習の展開について議論が深まった。また、集団で取り

組むことの意義や、集団の中で促される個の発達についても意見が拡がり、従来の決められたことをこなすだけの作業学習から脱却していく必要があることが確認された。

午後からの1本目は、チャレンジキャンパスさっぽろの岡山英次施設長の「専攻科3年生が進路を自ら決定していった経緯」では、生徒自身が、自ら選択し、調べ、お願いし、話し合い、行動し、振り返る過程の中で、学校では実現することが難しい、個をじっくりと受け止めた個に合わせた学びについての報告があり、そういう取り組みの中での豊かな発達について確認することができた。

2本目は、釧路養護学校の市橋博子先生の「「できるようになること」とはなにか」というレポートであった。日常の学校生活の中での生徒の発達の姿の報告で、「できる、できない」の視点だけで子どもたちをとらえるのではなく、その背景や理由を探ることで子供の発達が促されるのではないかという点で議論が展開された。昨今の個別の指導計画の目標の立て方、評価の在り方を見直し、深く掘り下げて考えを共有していく評価の在り方を、想像していく必要があることを確認することができた。

共同研究者からは、福祉や現代社会の課題の報告と、一本一本のレポートに対する今後の展開の助言があった。また、手の使い方、使わせ方のモデルの提示、日々の生活の中で繰り返される表出（リハーサル）、育ち（トレーニング）をどう発達的にとらえ、演出していくかの視点、好きの島をたくさんつくり、良い記憶を積み重ねることにつなげていく視点などの具体的な助言もあった。

本グループの議論の基盤は、子どもたちの発達をどう支えるかということにあった。それを、作業学習、日常生活、教師の在り方、集団のとらえ方など様々な視点で議論を深めることができた。学びが多く、明日の実践につながる貴重な討論になったことを報告する。